

「節目」に当たって (メルマガ 2021年4月号)

4月7日、かわさき市民アカデミーの開講式が行われました。一年前は新型コロナウイルス感染症が広がり始め、対処の仕方も不透明な状況でしたので、開講式も前期講座も中止（後期にスライド）されました。2年ぶりに行われた開講式は、福田川崎市長様や小田嶋教育長様をはじめ来賓をお迎えし、会場への参加者が57人、オンラインでの参加者が82人、合わせて139人の受講生の皆様の参加をいただいて開催することができ、本当に嬉しく思います。オンライン参加はコロナ禍で生まれた新たな発想による初めての取組です。

受講生の皆様には、開講式を心待ちにされていたことと思います。また、コロナ禍にあってアカデミーの継続に全力を尽くされた事務局はじめ関係の皆様のご努力、ご支援に感謝と敬意を表したいと思います。おかげさまで今回は第30回という節目を迎えました。

日付が前後しますが、市内の公立学校では4月5日に入学式が行われました。子どもたちの夢や希望に満ちた笑顔が輝いていたことでしょう。依然コロナ禍の収束には至りませんが、昨年は学校休業の中で恐々としていたことを思うと、人生に数度しかない入学式を子どもたちや保護者、ご家族には喜びと安堵の中で迎えられたことと思います。

こうした「第30回開講式」や「入学式」などを「節目」と呼びますが、私は妙を得た表現だと思い、好きな言葉です。申すまでもありませんが、「節目」の「節」は竹の節に由来するもので、中が空洞な竹が20メートルを超える高さまで成長できるのは、竹の空洞の中で節が支えになっているからです。そして、台風時の強風にもしなやかに耐え、大雪の日には折れ曲がるくらいに先端が地面に着きそうになっても、雪解けとともに見事に復元力を発揮できるのも、節があることに由るものです。まさに人生、こうありたいものです。

「節目」の同義語には、「一区切り」「一段落」「境目」「岐路」「分かれ目」などがありますが、人生の重要な時点を表現するには、人が成長する姿と、大空に向かって真っすぐに伸びる竹の有様とを重ねると、「節目」が一番似合うように思います。「節目」は人の場合に限るわけではありませんが、人生の歩みにおいて大切な時点を「節目」と呼ぶようにした先人の知恵は見事だと思えます。

竹は、松や梅と並べて「松竹梅」と縁起のよいものとされ、清浄な植物の一つとして重宝されていることや、古くから軽くて加工性の高い素材として、竹籠、竹箒、茶道・華道の道具、楽器などに幅広く使われ、私たちの生活と馴染みが深く、親しみを感ずります。そうしたことから、竹の節を語源とする「節目」が自然と使われたのではないかと想像します。

因みに、英語では「節目」を直訳する言葉がなく、「turning point」(転換点)や「milestone」(マイル標石)が同じ意味のようですが、「入学式」や「第30回開講式」を言い表す言葉としてはしっくりこないように感じます。

今年は暖かな日が早く訪れ、近郊の野山は新緑が鮮やかですが、竹林ではもう筍が顔を出しています。コロナ禍にありますが、竹の逞しく成長する姿に励まされながら、この年度始めを節目として更なる成長を図りたい、そんな気持ちの今日この頃です。(N.W)